

砂礫層 (完新統の扇状地堆積物)



不整合面

黒雲母花崗閃緑岩
(阿武隈花崗岩類)

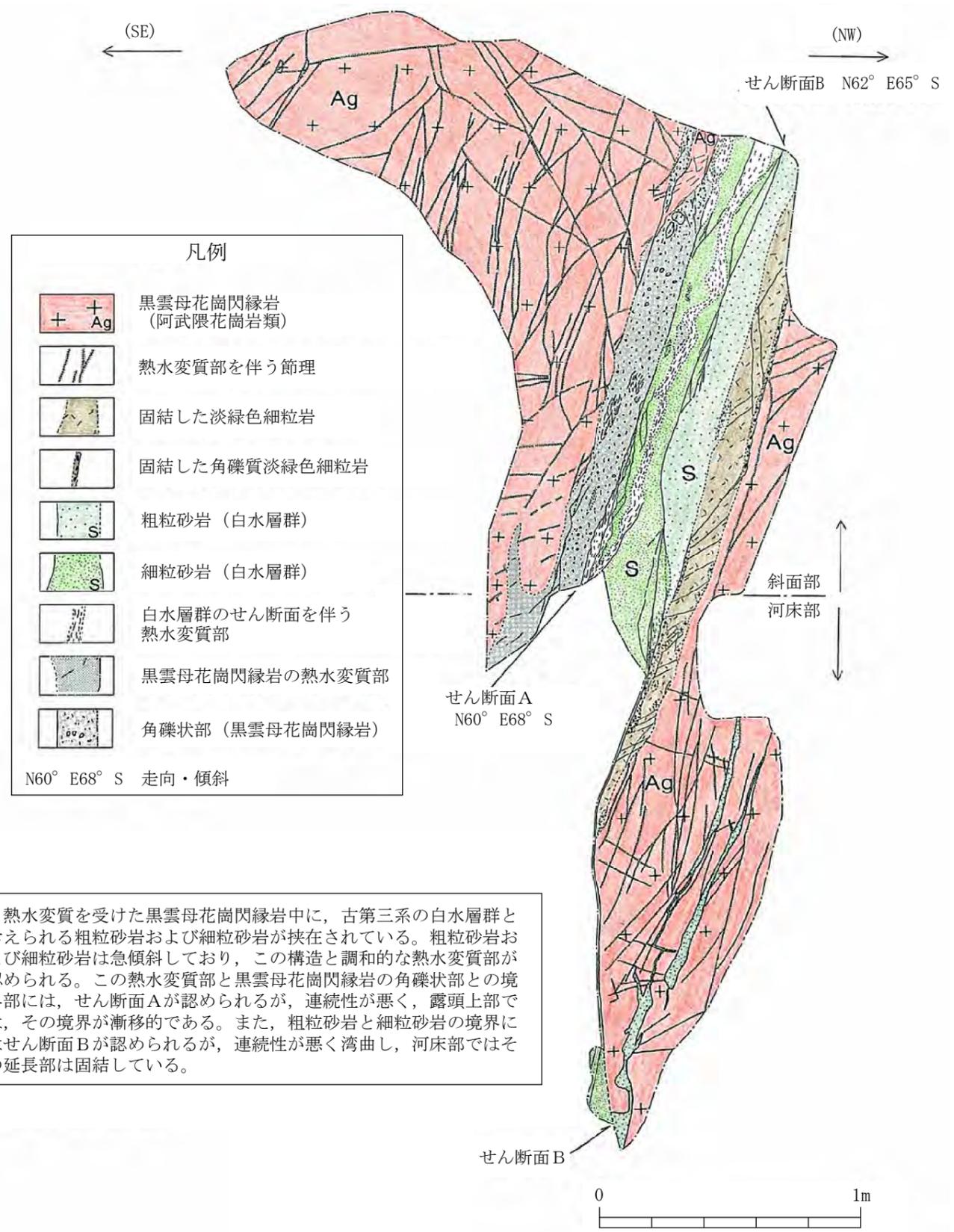
黒雲母花崗閃緑岩
(阿武隈花崗岩類)



せん断面を伴う固結した熱水変質部

N63E, 68S

写真1 露頭全景



凡例

	黒雲母花崗閃緑岩 (阿武隈花崗岩類)
	熱水変質部を伴う節理
	固結した淡緑色細粒岩
	固結した角礫質淡緑色細粒岩
	粗粒砂岩 (白水層群)
	細粒砂岩 (白水層群)
	白水層群のせん断面を伴う 熱水変質部
	黒雲母花崗閃緑岩の熱水変質部
	角礫状部 (黒雲母花崗閃緑岩)

N60° E68° S 走向・傾斜

熱水変質を受けた黒雲母花崗閃緑岩中に、古第三系の白水層群と考えられる粗粒砂岩および細粒砂岩が挟在されている。粗粒砂岩および細粒砂岩は急傾斜しており、この構造と調和的な熱水変質部が認められる。この熱水変質部と黒雲母花崗閃緑岩の角礫状部との境界部には、せん断面Aが認められるが、連続性が悪く、露頭上部では、その境界が漸移的である。また、粗粒砂岩と細粒砂岩の境界にはせん断面Bが認められるが、連続性が悪く湾曲し、河床部ではその延長部は固結している。

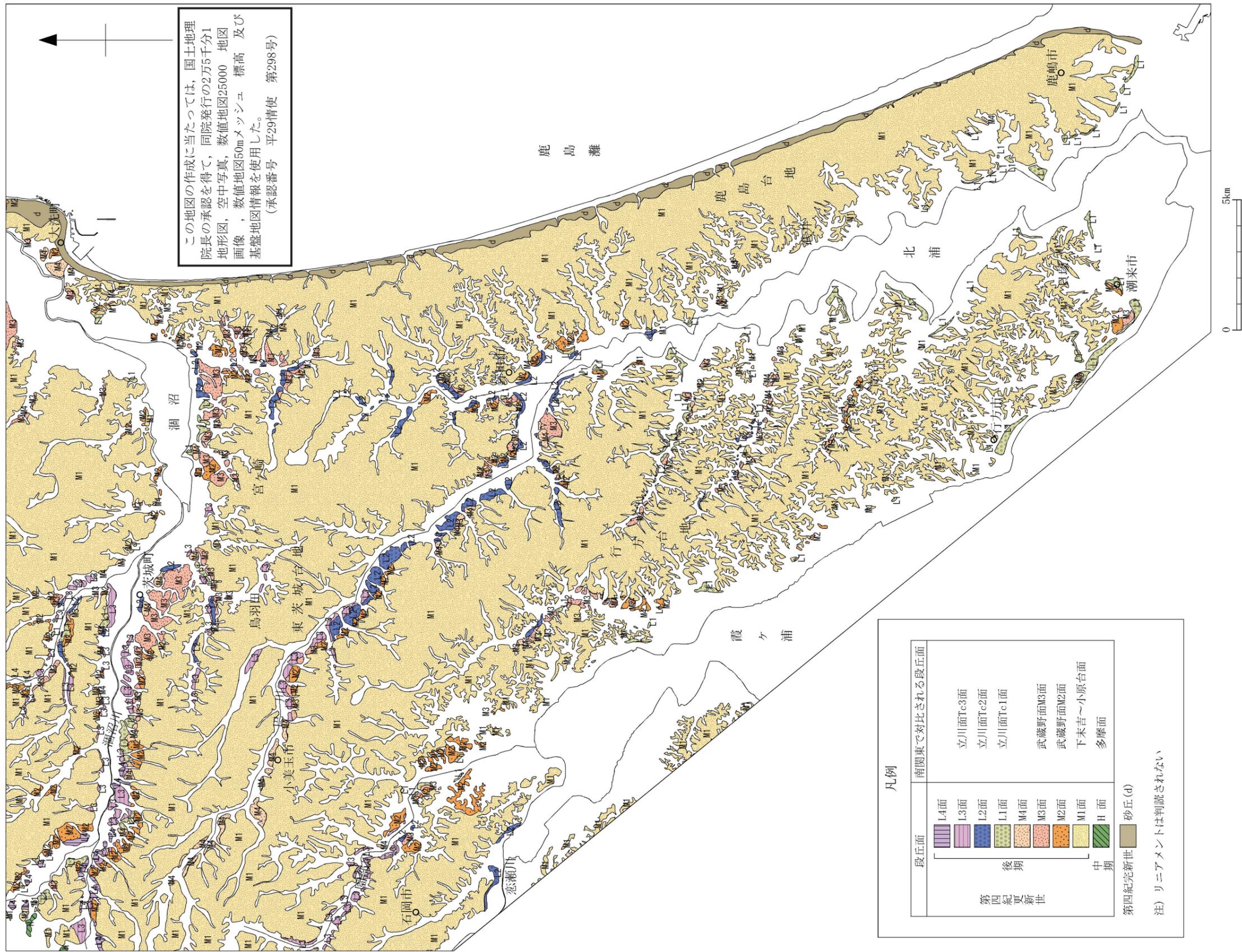
第1.3-112図 露頭スケッチ (高萩市金成北東:Loc.SY-3)



写真1 露頭傾斜部全景



写真2 露頭斜面部上部拡大



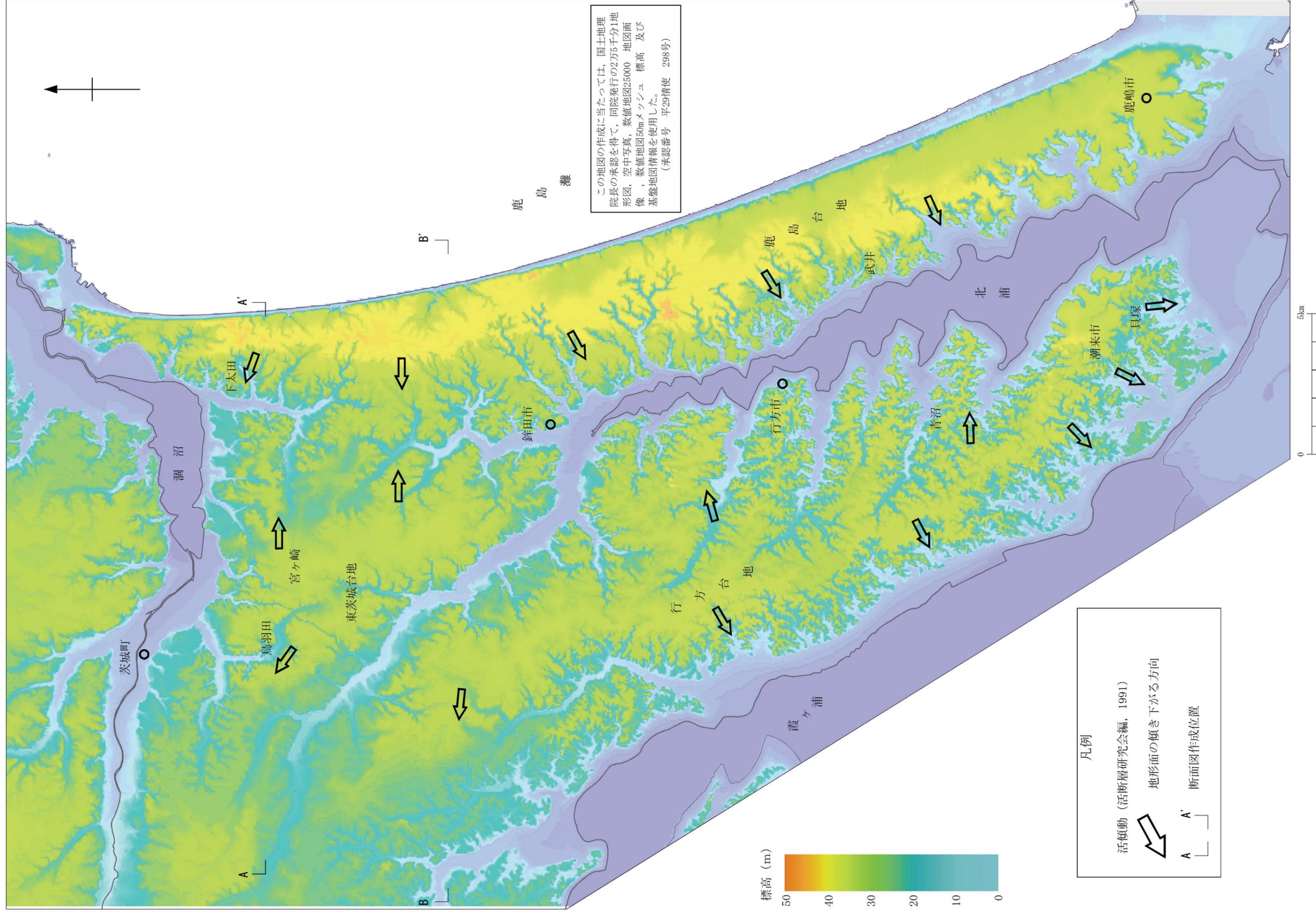
この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図、空中写真、数値地図25000 地図画像、数値地図50mメッシュ 標高 及び基礎地図情報を使用した。
(承認番号 平29情使 第298号)

凡例

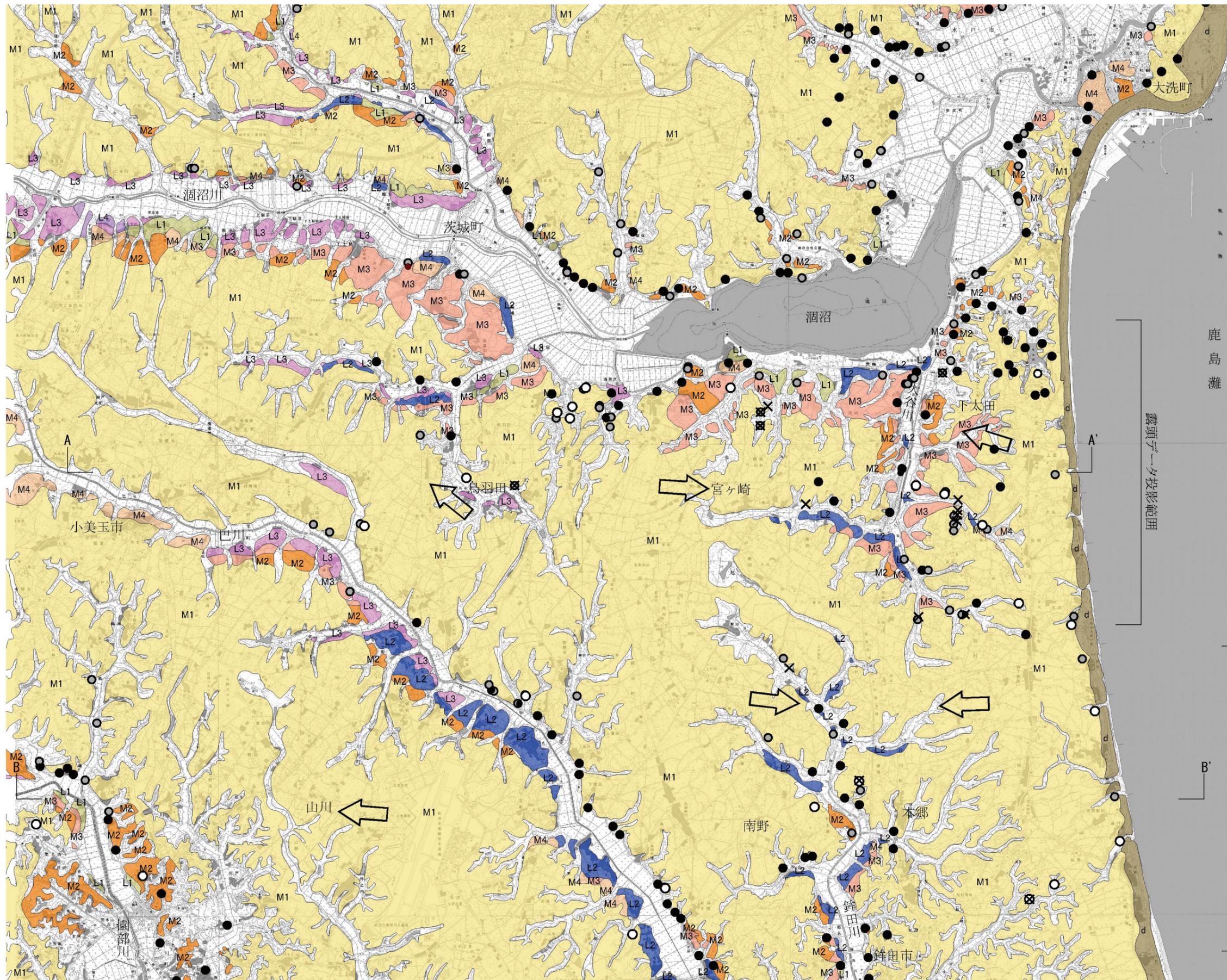
段丘面	南関東で対比される段丘面
L4面	立川面Tc3面
L3面	立川面Tc2面
L2面	立川面Tc1面
L1面	武蔵野面M3面
M4面	武蔵野面M2面
M3面	下末吉～小原台面
M2面	多摩面
M1面	
H面	
第四紀更新世	
中期	
後期	
	第四紀完新世
	砂丘(d)

注) リニアメントは判読されない

第1.3-114図 鹿島台地・行方台地周辺の活傾動周辺の変動地形学的調査結果



第1.3-115図 鹿島台地・行方台地周辺の活傾動周辺の地形面解析図



この地区の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図、空中写真、数値地図25000（地図画像）、数値地図50mメッシュ（標高）及び基盤地図情報を使用した。
（承認番号 平29情使、第298号）

凡例

段丘面	南関東で対比される段丘面
L4面	立川面Tc3面
L3面	立川面Tc2面
L2面	立川面Tc1面
L1面	
M4面	武蔵野面M3面
M3面	武蔵野面M2面
M2面	下末吉面～小原台面
M1面	
砂丘(d)	

- 露頭観察地点
- 断面図に示した柱状図位置
- × 白斑状生痕を確認した露頭
- 文献の露頭及びボーリング位置
[5万分の1地質図幅 磯浜(1975)]
[5万分の1地質図幅 石岡(1981)]

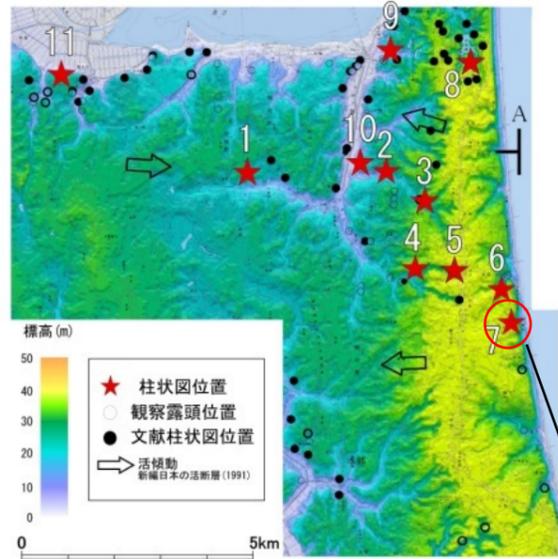
A A' 地形地質断面図作成位置

← 活断層研究会編(1991)に示された活傾動位置
矢印の向きは地形面の傾き下がる方向

第1.3-116図 鹿島台地・行方台地周辺の活傾動周辺の地質調査結果



第1.3-117図 鹿島台地・行方台地周辺の活傾動周辺の地形及び地質断面図



露頭7において赤城水沼9,10テフラ (約13万年前, 鈴木, 1990)を確認

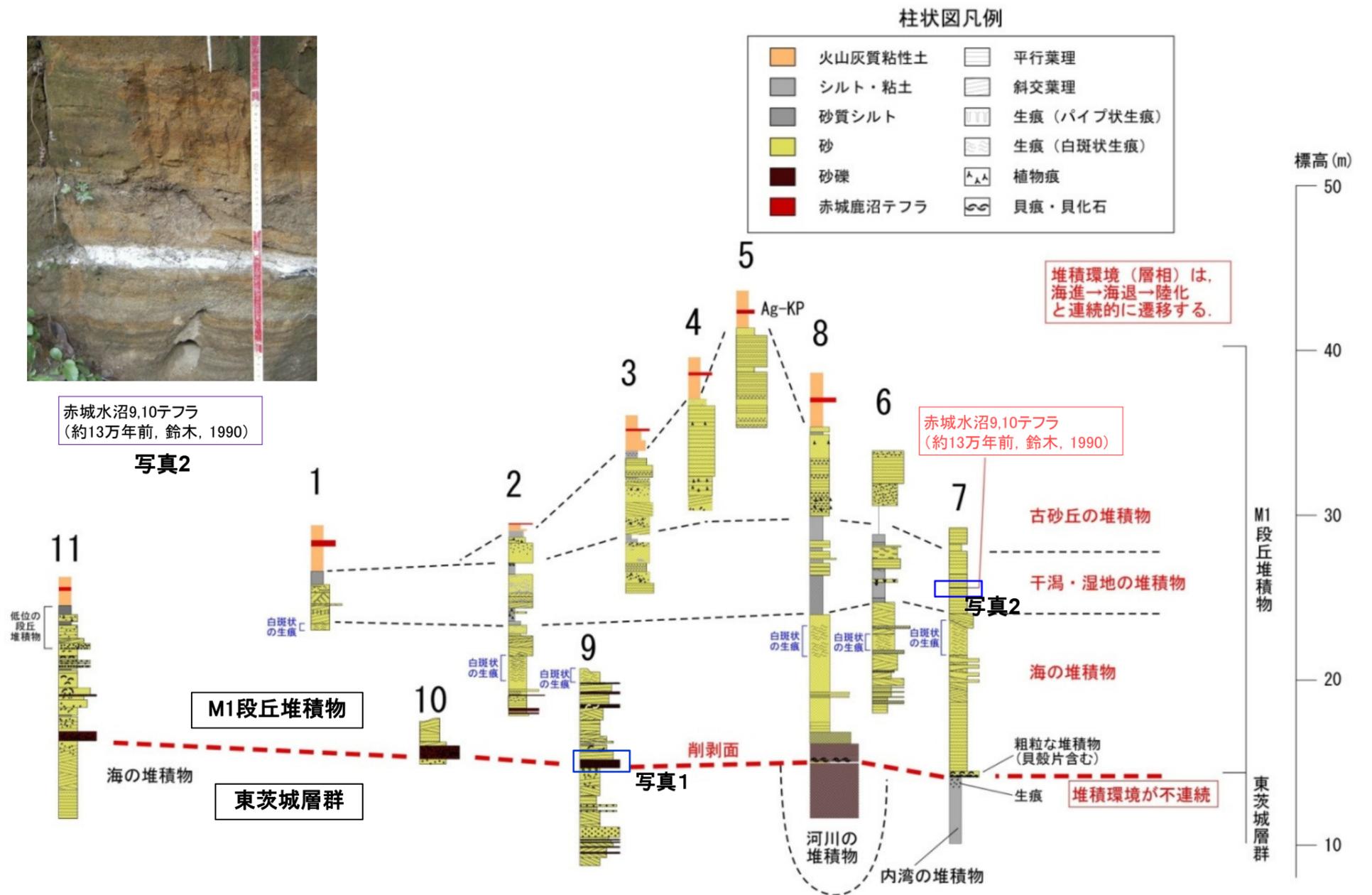


赤城水沼9,10テフラ (約13万年前, 鈴木, 1990)

写真2

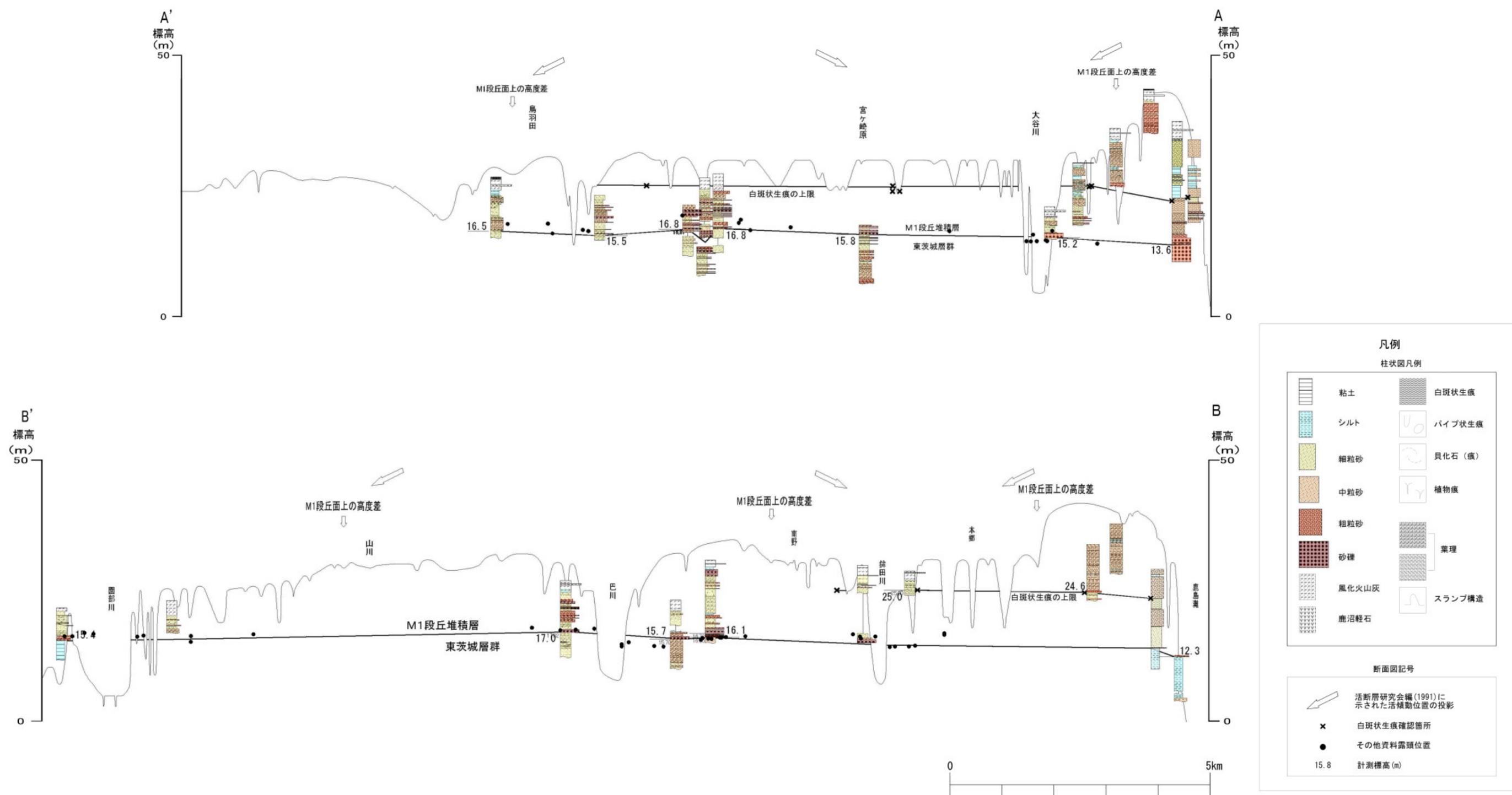


写真1



- 文献調査, 地表地質調査等の結果によれば, 本地域の第四系は下位から東茨城層群, M1段丘堆積物が分布している。
- M1段丘堆積物は基底に礫層を伴い, 下位の東茨城層群と不整合関係で接している。また, M1段丘堆積物の下部は, 貝殻片含む浅海性の海成層から成り, その上部には白斑状生痕を伴う層準が認められる。
- 海成層の上位の堆積物には, 赤城水沼9,10テフラ(約13万年前, 鈴木, 1990)が認められる。

以上のことから, M1段丘堆積物の下部は, MIS5eの堆積物であると考えられる。



M1段丘堆積物の基底面には、M1段丘面と調和的な高度差が認められず、ほぼ水平に連続して分布している。
 なお、M1段丘堆積物中の白斑状生痕を含む砂層も、ほぼ水平に連続して分布している。

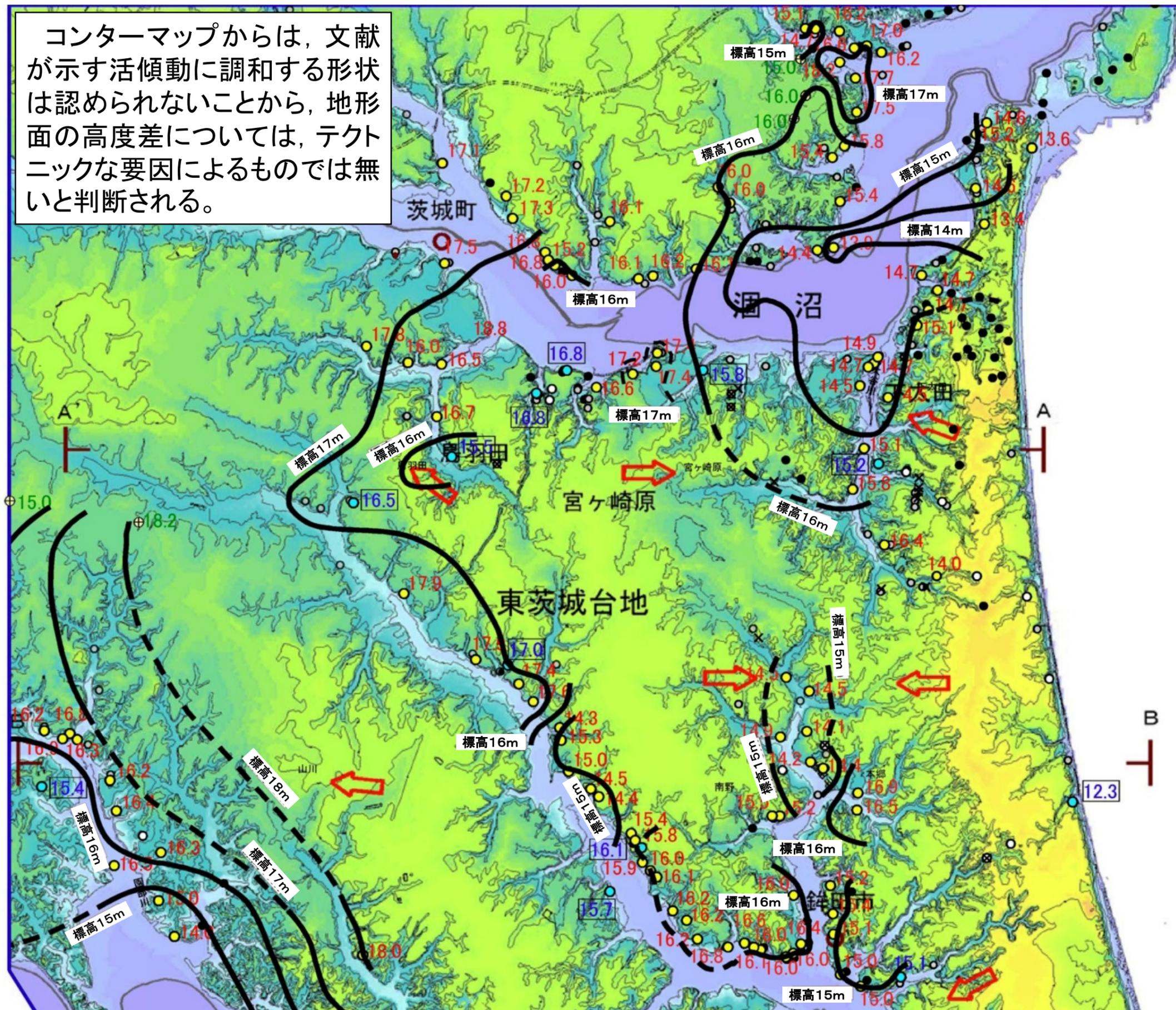


地形面の高度差については、テクトニックな要因によるものではないと判断される。

第1.3-119図(1) M1段丘堆積物の基底面に関する調査結果(1)

コンターマップからは、文献
 が示す活傾動に調和する形状
 は認められないことから、地形
 面の高度差については、テクト
 ニックな要因によるものでは無
 いと判断される。

この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図、空中写真、数値地図25000(地図画像)、数値地図50mメッシュ(標高)及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平29情使, 第298号)



凡例

等高線
 C M1段丘堆積物(見和層上部) 下限の等高線(1m間隔)

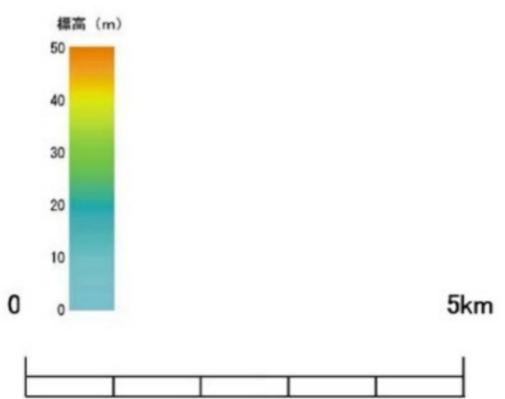
露頭記号
 ● 調査観察露頭の位置と M1段丘堆積物下限の標高
 ● 15.2
 ● 文献に記載される露頭の位置と M1段丘堆積物下限の標高
 ● 15.2
 ⊕ 文献に記載されるボーリングの位置とM1段丘堆積物下限の標高
 ⊕ 15.2

[その他の露頭]
 ○ 露頭
 ○ 柱状図作成露頭
 × 白斑状生痕が認められる露頭
 ● 文献露頭・ボーリング位置

※文献: 1/5万地質図幅 磯浜(1975)
 1/5万地質図幅 石岡(1981)

活傾動(活断層研究会編, 1991)
 ↗ 地形面の傾き下がる方向
 T-T 断面図作成位置

※ 段彩図の作成には、国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ(標高) 日本II」を使用した。



第1.3-119図(2)

M1 段丘堆積物の基底面に関する調査結果(2)